

『春色江戸紫』の写本『江戸紫』利用

黒澤 暁

一、はじめに

『春色江戸紫』とは、山々亭有人による人情本で、全三編のうち初編と二編が元治元年に、三編は明治以降に刊行された。また、写本『江戸紫』をもとにした改作作品の一つとして知られている。『春色江戸紫』には、写本『江戸紫』をどのように改作したのかという問題と、幕末の人情本の様相を知る一つの手がかりという二つの問題点を持つ。

まず写本『江戸紫』について述べる。写本『江戸紫』は、文政初年年に成立したとされているものの、作者は未詳である。内容は、宗治郎とその許嫁のお組を中心とした物語である。宗治郎は古着商坂松屋の養子となり惣領として育つ。しかし、養父と下女の間に弟善次郎が生まれ、宗治郎は家督を譲るために

放蕩生活をし、許嫁で養母の姪であるお組に対しても冷たい態度を取る。思惑通りに勘当を受けた宗治郎は上州の絹問屋で奉公をする。宗治郎は江戸に戻り、大名の妾であった知清と出会う。知清のもとでお組と再会する。お組は宗治郎の勘当後に善次郎から実家の借金を理由に結婚を迫られ、それを拒んだ末に姉と琴の師匠をして生活をしていった。二人は再会を喜び、宗治郎は勘当を許され、お組の実家を再興させ一家は繁栄する。こうした平坦な内容にもかかわらず、出版されず写本で流布した理由も不明である。

この写本『江戸紫』の最初の改作作品は、『清談峯初花』（十返舎一九初編文政二（一八一九）年刊）である。この『清談峯初花』をもつて人情本最初の作品とされている。その後、合巻の『洗鹿子紫江戸染』（墨川亭雪麿作、初編天保六（一八三五）

年刊)や『琴声美人録』(山東京山作、初編弘化四(一八四七)年刊)と改作されている。こうした改作をうけて『春色江戸紫』が刊行されていることから、写本『江戸紫』は成立以降読者を獲得し続けていたことがわかる。これについては、鈴木圭一の調査⁽²⁾による三十六本の諸本調査により、長期間読者を獲得したとされている。また、鈴木圭一は写本『江戸紫』を含む人情本の大きな型として「商家繁栄譚」があると述べている。このことから、『春色江戸紫』が写本『江戸紫』の改作作品として、どのように改作が行われたのか明らかにする必要がある。

そして『春色江戸紫』が元治元年に出版された幕末の人情本であることにも言及する必要がある。従来人情本は、天保の改革以降、凋落の一途をたどった一時期の流行とされてきた。しかし元治元年という時期に刊行されたことに加え、作者が山々亭有人であることには注目が必要であろう。それは、山々亭有人が明治期に仮名垣魯文とともに三条の教憲をうけて「著作道書上ゲ」を提出して明治期の小説の指針を提示した人物であり、『東京日日新聞』や『やまと新聞』を創刊して、その記者として活躍した人物であるためである。つまり山々亭有人は、幕末から明治への過渡期の戯作者と言える。その有人による『春色江戸紫』には、有人を取りまく人物が様々な形で見られる。ま

た、『春色江戸紫』は明治十六年にも出版されている。そのため幕末から明治期の人情本の動向の一つとして、また有人とその周辺を知るためにも『春色江戸紫』は重要な作品といえる。

こうしたことから、本稿では、『春色江戸紫』を写本『江戸紫』の改作作品としてどのように改作されたのか、『春色江戸紫』と写本『江戸紫』との違いを、女性の登場場面を中心にとのよりに改作したのかを述べることで、写本『江戸紫』の改作作品としての『春色江戸紫』の位置づけを行う。そのうえで、幕末の人情本として山々亭有人と周囲の人物との関わりについて述べる。

二、改作作品としての『春色江戸紫』

ここでは、まず『春色江戸紫』を写本『江戸紫』の改作作品としての位置づけを行う。なお、本稿で使用する写本『江戸紫』の本文は、国立国会図書館所蔵本⁽³⁾に依る。『春色江戸紫』の本文は、おもに弘前市立図書館所蔵本を利用した。しかし弘前市立図書館所蔵本は初編上巻から中巻にかけて、丁の欠損が見られるため、同版と思われる東北大学図書館狩野文庫所蔵本⁽⁵⁾を用いた。なお、版本以外に『春色江戸紫』の本文として、明

治十六年刊の国立国会図書館所蔵本⁽⁶⁾がある。明治十六年版は、初版本との本文の違いは、おもに振り仮名の有無や仮名遣いといったもので、大きな違いは見られない。重要な違いとして、序文や口絵・挿絵がある。この違いは、初版本と明治十六年版の出版の背景を考える上で重要な問題である。この点については、後述する。

まずは、『春色江戸紫』に至まで、写本『江戸紫』がどのようにに改作されたか述べておきたい。前述したように、写本『江戸紫』は、江戸の古着商坂松屋を舞台とした養子の宗治郎とその許嫁のお組を中心としている。最初の改作作品は、十返舎一九の『清談峯初花』で、ここでは宗治郎を捨五郎、お組をおくと登場人物の名前を変えているものの、筋は概ね写本『江戸紫』と同じである。しかし、捨五郎が上州への旅路で上州の富豪と出会う場面や、知清におくんととの関係が知られる場面では、滑稽味あふれる場面へと変更が見られる。次に『洗鹿子紫江戸染』は、宗治郎を總司郎、お組はそのままの名前を使用し、善次郎は世之介と名前の変更が見られる。ただし、總司郎が二十才、お組が十八才、世之介が八才のため、世之介がお組に結婚を迫るといふ場面がない。また、總司郎は遊興の末に勘当されるが、上州へ行くことなく、世之介の説得によって勘当が

許されるものとなり、より簡素な筋となっている。最後に『琴声美人録』は、名前の変更はないものの、『加賀見山田錦絵』の岩藤が登場し、宗治郎に言い寄ることでお組と宗治郎の仲を乱し、二人の誤解がとけるといふ一つのパターンが繰り返され長編化している。このように、写本『江戸紫』の改作作品は、様々な工夫を加えていた。

こうした改作を経たうえで、『春色江戸紫』は歌舞伎の利用や登場人物の変更を加えることなく、むしろ写本『江戸紫』の筋に立ち返るような改作を行っている。ただし写本『江戸紫』をそのまま刊行するのではなく、場面の省略や追加、写本『江戸紫』には見られない人物の登場など、意図的な変更が見られる。そのため、ここでは『春色江戸紫』と写本『江戸紫』の違いから、山々亭有人の改作の特徴を捉えたい。

まずは、どのような場面を省略しているのだろうか。おもに場面を省略しているのは、主人公惣次郎が勘当を受ける場面と上州へと移動する場面である。写本『江戸紫』では、京都から本店の番頭が詮議し、宗治郎へ勘当の旨を告げる場面がある。

番「コレ宗治郎殿、これまでかみがたよりも異見度く、申越し其上へ親類もいろく異見なしたる処をひとつも聞入れなく我俣の振舞、(中略)町人の身分としてまた

あるまじき不埒千方此事京都本店大旦那のさしずにて

此度善兵衛殿親子の縁をきり勘当いたすなり。親の手を離れて何も一人にて今迄の通り氣随ひ氣俣か出来るもの

やら、出来ぬやら宗治郎自分の心にてなんといたされる、

何方へなりとも心まかせに行きたまへ(卷之二)

これに続いて、宗治郎は勘当を受け入れ、坂松屋の番頭から上州へ行くよう進められる。宗治郎が勘当される場面を詳細に描き、宗治郎の行動を「我俣の振舞」とし、「親の手を離れて何も一人にて今迄の通り氣随ひ氣俣か出来るものやら」など評価をうけることで、宗治郎の勘当が、善次郎に家督を譲るための見せかけであり、宗治郎自身の望んだことでありながらも誤解を受ける悲しみがうかがえる。これによって、お組との別れが宗治郎の本意ではないものとして哀切をもつて印象づけられることとなる。しかし『春色江戸紫』では、次に示すように惣次郎の勘当の場面は具体的には描かれない。

兼て覚悟の事ながら、今宵吾家お見納めとおもへば、名残の惜まれて、男泣きにぞ泣るたりしが斯であるべき事ならねば夫よ、是よと身支度なし夜明ての勘当を、ひたすら心に待けるとぞ(初編下巻)

ここでは惣次郎が父の勘当を待つのみで、具体的な会話は書か

れていない。ただし、「今宵吾家お見納めとおもへば、名残の惜まれて、男泣きにぞ泣るたり」と惣次郎が勘当を待ちつつも別れを惜しむ様子が見られる。『春色江戸紫』では、惣次郎の勘当の場面を描いてはいないものの、お組との別れや家との別れを惜しむ心理描写が台詞ではなく文章で表現されている。

また、省略した場面として、惣次郎の上州への旅路が挙げられる。写本『江戸紫』では、宗治郎の旅装束の説明から始まり、地名を交えながら次第に上州へと移動している。

江戸に知る人おふければ、人目を憚彼の舟宿を東雲に、本郷通りを打立、心ほそくも上方へと心ざし、岩槻道と木曾路への追分越て、明る夜を告るそらねや鶏声ケ雀、菓鴨過ぎれば、庚申塚、護国寺の森左りに見なし、畷続に板橋や、蓮沼志村打過ぎて、戸田の曠野の花薄き、弥生の頃は桜艸、稚は蟋蟀の名所也と、いそがぬ道をぶら／＼と、何か心に苦勞に思ひながら、戸田の川船打渡り、堤を越して蔵宿、白幡過ぎて浦和なる月読の宮伏し拝み、此宿端の茶廓に暫く憩ひ、遠く望は浅間カ嶽に立煙、空に鸚鵡近く見る。(卷之三)

ここでは「戸田の曠野の花薄き、弥生の頃は桜艸、稚は蟋蟀の名所也と、いそがぬ道をぶら／＼と、何か心に苦勞に思ひなが

ら」とあるように、勘当された宗治郎が遊山をしながら、ゆつたりとした足取りで旅をしている様子が描かれている。そして地名とその名所や見所を交えて説明が加えられている。このような描写が上州の高崎まで続いている。この後、宗治郎は安中松井田の間で上州大町人の隠居と道連れになり、その隠居のものとて手代をすることとなる。

こうした宗治郎の上州での場面は、改作作品の中でも『清談峯初花』では、次のように改作される。

捨五郎はひとり、上がた所々見物して、それより木曾路にかゝり、序ながら善光寺に参詣し、越後をも遊歴せんと、足にまかせて、おもひのまゝにへめぐり、三国かいだうの二股といへる宿にとまりたる夜、折節相客もなく、たゞひとり座敷に、まくらして、そこ爰見廻すに、床脇の袋戸の絵、めづらしき図のあるに、はねおきてながめやりつゝ、何心なくその袋戸をあけて見れば、紙につゝみたるものあり。その形小判のなりにて、凡両ばかりの高にみへけるゆへ、捨五郎手にとりて見れば、相違なき小判なり、包紙に書付あるを、よみて見れば、上州原町宿絵絹屋瀬十郎とあるに、ふ審はれず（初編上册）

この捨五郎は、写本『江戸紫』の宗治郎にあたる人物である。

宗治郎と同様に勘当された捨五郎は、急ぐこともなく旅をしている。この旅の途中で宿に置き忘れられた百両を見付け、その金を持ち主の絵絹屋瀬十郎へ返すことで、捨五郎は絵絹屋に奉公する。ここでの大きな違いは、はじめから上州へと向かっていた宗治郎とは異なり、捨五郎は偶然の出会いによって上州での奉公が決まっていることである。このように写本『江戸紫』では、宗治郎の旅の情景は、宗治郎の足跡を名所とともにめぐっている一方で、『清談峯初花』では、捨五郎は上州での奉公が決まる場面となっている。いずれも男性主人公の勘当後の姿を描いている。『春色江戸紫』で惣次郎の上州での様子は描かれているものの、惣次郎がどのように上州へたどり着いたのか、また上州の富豪に奉公することとなった経緯は、『春色江戸紫』では作者による説明で終わっている。

その『春色江戸紫』で見られる上州での惣次郎の様子として、富豪の娘に思われながらも、娘を恋慕する従兄弟と一計を講じ、二人を結びつけるという場面がある。この場面は写本『江戸紫』にもみられ、ここでは「彼妹娘は年は廿にて、せいは鴨居につかへるやふ」と描写し、言葉にも詛を加えることで田舎者らしく描写している。江戸から来た宗治郎の洗練された様子と対比させることで、お花の恋心を滑稽なものとしている。さらに、

お花が暗闇の中で相手が惣次郎と信じて喜八と結ばれる場面では、「互に田舎の骨太の達者にて、鼻息は牛の遠ふ吼するやふに大いきつきにて居る」としている。この二人の声を主人が聞きつけ盗人と思い、喜八とお花の関係が周囲に知れる。このように写本『江戸紫』では、宗治郎の上州での生活について上州の人物を、田舎者らしさを強調するかたちで滑稽さを加えている。

この場面にあたる『春色江戸紫』の描写は次に記す。

お捨は日頃慕ふ、惣次郎よりの玉章を見るに嬉しく気もわくく、同じ思ひの勘兵衛も、互に其の日の永きを恨み、一日千秋の思ひなりしが、早や其の時に至るをもて、勘兵衛先に忍びてありしを、お捨は一閃に惣次郎なりと、思ふものから夢かとはかり嬉しくて、夫婦の語らひなしし後、惣次郎ならぬを知るとはいへど、疾や不慮の門に入りたる上は、今更詮術なければ、(第二編下之巻)

ここでは、写本『江戸紫』のお花と喜八にあたる人物お捨と勘兵衛を惣次郎が結びつけているものの、『江戸紫』でみられたような、具体的な田舎者の描写は見られない。また、勘兵衛の言葉使いから見ても、田舎らしい言葉使いが見られず、江戸の人物と上州の人物を対比するという意識が見られない。上州の

人物と江戸の人物を描き分けていた写本『江戸紫』と『清談峯初花』では、上州の人物を、滑稽味をもって描くために方言や身体描写が使われていた。しかし、上州と江戸の人物の違いが失われたことで滑稽味は失われる。さらに、『春色江戸紫』では、惣次郎を陥れるために金を紛失させるという計略がめぐらされる。これによって、惣次郎の上州での生活は、滑稽味を失い、周囲から陥れられるという惣次郎の苦難が印象づけられることになる。

ここまで、『春色江戸紫』で省略した場面を挙げた。これらの減少場面は、いずれも惣次郎に関する場面である。鈴木圭一という人情本の型である「商家繁栄譚」としては、惣次郎の足跡は重要な場面であろう。しかし、惣次郎の勘当の場面や上州への道中を具体的に描かないことで、『春色江戸紫』が惣次郎を主体とする「商家繁栄譚」としての印象を薄くしている。

また、惣次郎の勘当の場面や上州への道中を省略する一方で、追加された場面も見られる。追加した場面に注目し、それによつてどのような効果があるのか述べる。追加された場面のひとつとして、惣次郎の放蕩の場面がある。

幸「ヲヤく、お楽様何所へ往てお在だ」

楽「何所へも行きやアしないがネ」と御幸の耳に口を寄せ

て、何やら私語く、お幸も莞爾笑ひながら

幸「ヲや左様、夫ぢやアなんぞ御奢ヨ」

楽「ア、奢るともくなんでもお好次第」

幸「左様いへばお楽様、些と瘦た様だね」

楽「おふざけでないヨ」トいふ時、惣次郎も出来り、

惣「左楽子や小照さんは」

幸「今来ますだろう」トいひながら惣次郎の顔を見て笑つて

惣「お幸さん人の顔を見て否に笑ふの」

幸「何ぞお奢被成ませうね」

惣「勿論サ」

小「オヤくお楽さん」

左「やつと探し当たんだか、鬢のほつれ塩梅なんぞア何様もあやしい」(初編卷之中)

右の場面は、惣次郎が落語家の左楽と鯉中、芸者のお幸・小照・お楽らと遊興として隠れんぼをした後の場面である。直前には、惣次郎に以前から思いを寄せていたお楽が惣次郎と思いを遂げる場面がある。ここでは、お楽の念願の恋が叶ったことを手助けしたお幸や左楽が茶化している。この場面で注目したいのは、お楽という特定の惣次郎の馴染芸者の存在と左楽と鯉中という

実在の落語家の登場である。

まず、お楽という馴染芸者に注目したい。写本『江戸紫』にも、宗治郎の放蕩場面は見られるが、特定の芸者との関係は見られない。『春色江戸紫』では、特定のお楽という芸者を登場させ、お楽との恋の始まりから描いている。またお楽の登場する場面は、今後も見られ、結末では惣次郎の妾となっている。このようにお楽は、『春色江戸紫』で追加された人物であり、作品の中でも重要な存在であると考えられる。このお楽の存在意義については、後述する。ここでは、左楽に「鬢のほつれ塩梅なんぞア何様もあやしい」と、惣次郎とお楽の情事の形跡をめぐりと指摘されることで、二人の生々しい恋の様子を表している。

次に左楽・鯉中の存在である。鯉中について詳細は不明だが、名前からみて滝亭一門の落語家ではないかと考えられる。左楽は、山々亭有人とともに三題噺を復活させた柳亭左楽で、山々亭有人も名を連ねた文人グループ粹興連のひとりでもある。そのほか、粹興連のひとりでもあった仮名書魯文なども『春色恋廻染分解』や『花暦封じ文』に登場している。このように山々亭有人の人情本には、実際に有人と交流のあった人物が登場し、当時の流行を取り入れている。こうした実在の落語家達の登場については後述する。

このように追加された惣次郎の遊興の場面では、写本『江戸紫』では登場していなかったお楽という馴染芸者が登場する。お楽という特定の馴染芸者を登場させることで、惣次郎との艶やかな恋の様子を描いた。また左楽や鯉中といった実在した落語家を登場させることで、当時の流行を描いている。

既に述べたように、惣次郎の放蕩生活の描写は増幅している。写本『江戸紫』では、具体的な人物として登場しなかった馴染の相手であったが、『春色江戸紫』ではお楽という特定の人物が登場している。またお楽とは既に馴染の芸者として登場するのではなく、惣次郎と結ばれる場面が描かれるのである。さらに、惣次郎の勘当後もお楽に対して手紙を残しており、写本『江戸紫』より追加している場面の一つと言える。

楽「若是もこれツ限り惣そう様に逢あれないやうになつたら如何どうしやうねへ」ト泪なみだぐむ

美「ナニ惣そうさんは惣領そうりやうだといふじやアないか左様さやうして見みりやアいつか一度は勘当かんたうがゆりずにはいまいはネなんでも信心しんじんして」

楽「時節じせつを待まつより致方しかたがないけれども亦且また那なを取とれといふにやア困こまりきるヨ」
美「何所どこの親おやでもそんなことはあたりまいだはネ」

楽「所ところがわたいの宅うちの継母おつかあは一通りじやアないからネ」(二編卷之上)

右は、惣次郎の勘当後、惣次郎からの手紙を読むお楽と仲間芸者の会話である。芸者という勤めである以上、男の心変わりや恋愛関係が失われてしまう不安定さがある。その中で、惣次郎は時分が勘当されたことや今後は上州へ行くことなどを手紙にしてお楽に残すことで、惣次郎がお楽に対して誠実な対応をしているといえよう。そのためお楽も「時節を待より致方がない」と惣次郎の戻りを待つつもりである。ただし「亦且那を取れといふにやア困りきるヨ」とあるように抱え主に且那を取るようせまられる可能性も高い。それでも惣次郎に操を立てようとすお楽の姿がこの場面からは見て取れる。こうした、お楽という惣次郎の馴染の芸者が惣次郎の手紙を読み、惣次郎に操立てをするという場面は、写本『江戸紫』には見られない『春色江戸紫』の場面である。こうしたお楽の操立ては、三編で報われることとなる。

楽「全体上州へ、発足はつそくなさる前に、鳥渡ちよつとでも来て、斯々かろくろだと咄はなしてお呉被成くれなはりやア、また其気そのきで、あきらめようもありませんが、アンな悲かなしい手簡てがみなんぞを、よしたもんだから吾儕わたしやア悲かなしくつて、アノ手紙てがみを見ちやア泣なみ、毎日まいにち

く泣てばかり居ましたは」

惣「左様か。自己も一寸逢に往ふかと思つたがイヤく夫じやア、却つて思ひの種だるうと、態と心を鬼にして、逢ずに発足のうちを些とは察して、貰わねじやアならぬい」

楽「夫でもお達者で、帰てうれしいネ、丁度三年になりますねへ。」(三編卷之上第十四回)

右は、惣次郎が上州から江戸に戻り、お楽と再会した場面である。お楽は惣次郎の不在の三年間を芸者として、惣次郎に操立てをしていたのである。またお楽その三年の間、「上州は江戸から西北の方へ当ると聞たから毎朝く陰膳を居」(三編卷之上第十四回)ていたのである。そうしたお楽の操立てが報われることとなる。このように、お楽という女性は、写本『江戸紫』には見られず、『春色江戸紫』で新たに登場した人物であるが、惣次郎へ操立てをする女性として描かれている。このお楽を単なる馴染の芸者としてではなく、惣次郎が手紙を残し、心にかける存在として登場していることは、お楽が実を尽す存在として独立させたい為ではないだろうか。それを確認するためにも、他の増幅した場面についても言及し、会わせて考察する必要があるだろう。

では、次に『春色江戸紫』で増加した場面として、お組の場面が挙げる。お組の場面で特徴的な点としては、お組自身の語る内容よりも、お組に対して語る内容に教訓性が色濃く見られる点である。

貞(前略) 最来春は、婚禮が有だらうから左様なりやア今迄とは違つて人の教訓も、しなければならず殊に女は一 endpoint の家へ嫁て再び鳴居は、またがぬもの、親や夫は無理を、いふものと心に納てさへれば、何もむづかしい理屈はない唯し女は心やさしく情深さを善とすると、女大学にもある通り、亦下女 endpoint 杯にも親夫小姑なんどの、氣に入らぬ殊があらうとも、蔭で、譏つて聞せて、下人は口さがないもの、夫を信じて人にも他言親夫の恥辱をば、世間へばつと知らせる様なもの。」(初編卷之上第一回)

右は、お組の伯母であり、惣次郎の養母のお貞の台詞である。お貞は長思いをしており、看病するお組に対して、惣次郎との結婚後の心得を説いている。お貞はお組に対して「殊に女は一 endpoint の家へ嫁て再び鳴居は、またがぬもの」と夫へ貞実を貫くように説いている。

お貞がお組へ語った内容は、お組自身の台詞からも見られる。組「中くもつて勿体ない否所じやアありませんけれども

親父や姉が申すには其方のお夫は惣次郎様より他にはないから祝ひは千年といひながら定めぬは世の習俗、惣次郎様にもしもの事でも有たなら尼になつて亡跡を弔へよとの御教訓夫故吾儕の一存に返回がなりにくうござります」(二編卷之中)

右は惣次郎の勘当後、善次郎とお組を結婚させようとするお牧に詰め寄られる場面である。お組は善次郎との結婚に対して、正面切つて拒否することはできずにいる。それはお組が内気な少女の要素を残しているためであろう。お組は父や姉の教訓を本音であれ、建前であれ善次郎との結婚に承諾できない理由にしている。

また、こうしたお組に対して語られてきた教訓は、お貞の遺言としても効力を發揮する。

絹「夫はくのこる方なき御信切主人でも鳥渡お目にか、りお礼も申はづなれど御存じの通りの大病、併おくみには言号の惣次郎様彼人を除て余所外に男も持なもたせぬと姉も「お貞がごと」親父も堅い遺言夫等を守り貴君の仰に随ひませぬは不孝ながら姉の口から善次郎様に随へとはどうマアめられませう」(二編卷之中)

右は前掲引用場面のあと、業を煮やしたお牧がお組の姉のお絹

を呼び出し、お組の実家であるお絹の家に金を貸したことを持出しつつ、お組と善次郎との結婚を勧めた事に対するお絹の返事である。ここでは、お貞がお組に語った二夫にまみえずという教訓が、お貞の遺言として効果を發揮している。こうしたお組への教訓は、お組自身の行動規範として作中で一貫したものととなっているのである。既に挙げたお楽においても見られた貞実という点では、お組にも共通するものといえる。

なお、お楽とお組の惣次郎への貞実を示す場面以外にも、教訓の強い場面が見られる。それは、お組の下女のお花の忠実さである。

花「他事の事でもござりませぬが旦那様が死去で四十九日も済うち御店を初め女中衆まで皆ンなお暇をお遣し遊し大きな御家内に今夜からお組様と唯二人、是には深い御様子がなくてはならぬ事なれど者焚のお世話の仕人もなく晝お困り遊ばしませう就ては何卒私をお役には立ませねどどういふものかお組さまにお別れ申がいつぞ悲しい(中略)斯して居れば主従三世の御恩の御主人にどんなのがあらうとも他人にもらす氣遣ひもなし唯今も申ます通りお人減に成ましても今ま女中衆の致したことは私一人で致しますから何卒お仕被成て被下まし」(二編卷之中)

右は善次郎との結婚を承諾しなかったお組とお絹に対し、お牧等が実家の借金を取り立てたために、お絹が使用人に暇を出した際の場面である。お組の下女として坂松屋にいたお花は主人であったお組に対して忠誠心を示している。この場面も写本『江戸紫』には見られない場面である。ここでは、お組に対する二夫にまみえずという教えとは異なり、町人といえども、主人に忠実であるという教訓性が見て取れる。またこの忠実さが男性の主従ではなく女性間の主従で見られることも見逃せない。

以上、写本『江戸紫』と『春色江戸紫』の場面の省略と追加に注目した。その結果、惣次郎の勘当の場面や上州への道中の場面が省略される一方で、放蕩生活の様子は具体的な描写と なっている。特に、惣次郎の放蕩生活の中で、お楽という特定の馴染芸者が登場していることは、写本『江戸紫』にない大きな違いである。そしてお楽に対して惣次郎が手紙を残し、お楽が惣次郎を待ち続けていたことからみても、お楽は作品内で重要な役割を果たしていると考えられる。さらにお組への教訓の場面は、お貞からの教訓やその遺言などで色濃く見る事ができた。このことから『春色江戸紫』は写本『江戸紫』により教訓性を色濃くする改作を行ったといえる。その教訓は、お組やお楽の様子から女性が男性へ貞実を尽すというものである。『春

色江戸紫』は写本『江戸紫』の改作作品の中でも女性への教訓性の強い作品である。

三、お組とお楽の役割

前項では、写本『江戸紫』の改作作品として『春色江戸紫』の特徴を述べた。本項では、改めてお楽とお組の人物像に注目したい。お組は、惣次郎が勘当された後、苦境に立たされる。それが単にお組の哀れさのみのために、描かれているのだろうか。お組の苦境を描くことで、作品にどのような影響があるのか述べる。また、お楽についても述べる必要があるだろう。それは、写本『江戸紫』には登場しない人物を『春色江戸紫』で新たに登場させた事に作品への意識がうかがえるためである。まずは、お楽が作品内で果たした役割について述べたい。お楽は、惣次郎の馴染の芸者である。そのため、惣次郎との間で艶めいた会話を交わすことができる。

楽「夫だつても他に情人があるならなんぞと可笑お言被成ぢやありませんか、此様な家業をこそ、致しますけれども是まで其様な気ぶりもありませぬ嘘だと思ひ被成ならお幸さんにもおみよさんにも誰にでも、聞て御覽被

成^{はい} もう実正^{ほんとう}に是^{これ}が惚^{ほれ}はじめの惚終^{ほれしまい}ですは」ト力をいれていふ。

物^{ぶつ}「他になけりやア猶重置^{なほじつしよう}ヨ、何も左様^{さよう}くやしがる子細^{こごと}もないのだが、お前の間様^{まへ}が悪^{わる}イのだ、自己^{おいら}は生れ^{うま}れついて野暮堅^{ぼかた}い方^{ほう}だから、情合^{いろあ}も当座^{とうざ}の花^{はな}なら真ツ平^{まびら}ヨ、能聞^{よ聞き}糺^{ただ}したうへでなけりやアなるめへじやアねへか」(初編卷之中)

ここではお楽の恋が成就している。同時に惣次郎とお楽が互いに一時の感情ではないと確認する。こういった会話は、人情本に多く見られる。思い合う男女が互いの思いを確認するために口説き合う、いわば人情本の定石といえよう。

こうした男女の会話に対して、井上泰至は『春色梅児誉美』をもとにして「読者は、あくまで完全に安全な地点に居ることを意識しながら、余裕を持って二人(筆者注…丹次郎と米八)の会話を音読し、恋人たちの喜びと不安をのぞき見るのである」⁽⁸⁾と述べている。ここでは、当時の読書方法である音読によって『春色梅児誉美』を読むことがどのような効果を生むか述べている。つまり、音読することで一定の距離を保ちながらも登場人物の心情を共感し、追体験、あるいは疑似体験しているのである。こうした読書は『春色梅児誉美』に限らず、人情本の読者による読書と考えられるのではないだろうか。また、この

読書をお楽に当てはめてみれば、読者はお楽が惣次郎と結ばれた喜びを疑似体験することになる。

また、井上泰至は「いき」の行方「春水人情本瞥見」⁽⁹⁾にて、「読者は、自分が安全な位置に居ることを知りながら、恋のリスク、恋のサスペンスを体験することができる」と述べ、「春色梅児誉美」においては、それが丹次郎の魅力ゆえにお長をはじめ米八や仇吉は恋の不安を感じ、それを読者が疑似体験している。ここで重要なのは、読者の代わりに作中の人物が恋をする上でリスクを負わなければならないことである。登場人物が、リスクを伴う状況に陥ってこそ読者の疑似体験である以上、作中での登場人物は危機に陥らなければならない。その危機を『春色江戸紫』に当てはめると、惣次郎の勘当である。ただし、既に述べたように、惣次郎の足跡をたどる場面は大幅に減少し、惣次郎の危機を追体験することは難しい。しかし惣次郎が勘当された後のお楽やお組の場面は増加していた。そのため、読者はお楽やお組の危機的状况を疑似体験することとなる。

では、お楽の危機的状况とはどのようなものだろうか。お楽は芸者である。芸者という勤めから、いつ惣次郎の心変わりによって関係が失われても不思議はない。しかし、二人の関係に

保障がないために惣次郎が勘当を受けた後も、お楽の身には生活に困ると言う事はない。それでも、惣次郎と会えなくなったお楽は、「誰しも其様な者だけれども全体お前お客のまへであんまりほん／＼惚談のはわるいヨ今日のやうなさばけた客はどうでも宜様なもの、中にやア腹を立人があらアね」と同輩のお美代にたしなめられ、勤めが疎かになっている。さらに、お美代とともに惣次郎の手紙を読み、「若是ツ限り惣様に逢れないやうになつたら如何しやうねへ」と涙を流す。お楽は、惣次郎との関係が切れてしまうという危機的状況にある。お楽の恋の切なさを、読者は追体験するのであろう。

次にお組の状況を見てみると、惣次郎の勘当後、お組はお楽よりも危機的な状況に陥っている。一つは実家の借金をたてに善次郎との結婚をせまられること、二つ目はそれを拒んだことよってお絹とお組は琴の師匠をして生活することである。こうしたお組の境遇は、裕福な家の娘が貧しい暮らしへと転落し、琴の師匠という人に使われる側の人へと身を落としたことを意味する。お組が身を落としたことはすべて惣次郎への操立てである。そのため、読者は、お組の恋を貫き通したために身を落とすという状況を疑似体験することができる。

ただし、読者が疑似体験するのは、お組の身を落とす状況だ

けではない。それは、『春色江戸紫』で大幅に増加していたお組への教訓の場面である。お組はお貞とお絹から、二夫にまみえずという教訓を受ける。この教訓は、お組に共感している読者へと届けられるのである。つまり、お組が経験する苦境を読者が疑似体験すると同時に、お貞やお絹による教訓はお組だけでなく読者への教訓として作用するのである。

読者がお組やお楽の状況を疑似体験することと、お組への教訓が読者へも作用するためには、お組とお楽が危機的な状況に陥ることが重要なのではないだろうか。お組もお楽も惣次郎の勘当にともなう、不安な感情や立場になり、お組に至っては身を落とすこととなった。そうした状況があるからこそ、読者はお組とお楽を哀れに思い、その心情に寄り添おうとする。つまり、『春色江戸紫』においては、惣次郎の勘当は、鈴木圭一という「商家繁栄譚」としての側面だけでなく、お組とお楽が危機的状況に陥るためのきっかけといえる。

以上のように、『春色江戸紫』ではお楽とお組は、読者に二人の恋の不安定な状況を疑似体験させる役割があった。特に、お組が保障された立場の少女が貞節から身を落とし、不安定な立場となることで、お組の哀れさが増し、お組に語られる教訓は、お組を疑似体験する読者に届けられることとなった。この

教訓を、より読者に受け取りやすくするためには、お組の身を落とすという過程が必要不可欠である。

四、山々亭有人と粹興連について

冒頭でも述べたように『春色江戸紫』には、元治元年版本と明治十六年版の二種類の本がある。この二種の本文は、仮名遣いなどに軽微な変更はあるものの、本文の大きな変更は見られない。しかし口絵・序文・挿絵などに大きな違いが見られる。この違いを通して、元治元年と明治十六年の山々亭有人とその周辺について述べる。

まず元治元年版の序文・口絵・挿絵の特徴について述べる。まず序文は、初編と三編は山々亭有人が、二編は仮名垣魯文が記す。なお二編の序文の後には、出場扇夫の狂歌があり、三編の序文の後には麟堂伴兄と春廻屋幾久による三題噺が掲載されている。山々亭有人、仮名垣魯文、出場扇夫、麟堂伴兄、春廻屋幾久の共通点は粹興連という文人グループである。この粹興連とは、粹狂連と興笑連が一体となったもので、三笑亭可楽が始めた三題噺を復活させ、『春色三題噺』〈春廻屋幾久編、初編 元治元年（一八六四）刊〉や『粹興奇人伝』〈仮名垣魯文・山々

亭有人編、文久三年（一八六三）序〉を出版して広めたことで知られる。有人自身、三編の序文では「粹興連有人」と名乗っており、粹興連のメンバーが序文や狂歌を寄せていることから、『春色江戸紫』の出版に粹興連の影響が強く見られる。とくに三編に掲載されている三題噺は、麟堂伴兄の題が江戸紫・唄女・錦絵で、春廻屋幾久の題が春雨たより・作男となっており、『春色江戸紫』に関連する題を用いていることから、この出版のため新たに作った三題噺と考えられる。

次に口絵・挿絵ともに猛齋芳虎による。この口絵・挿絵にも粹興連の関わりが見られる。初編の口絵には惣次郎を中心としてお楽、お幸、金八が描かれる遊興の様子の中に柳亭左楽と仮名垣魯文が見られる。さらに同図の中には、「初松隅田の風にくふかれけり」という春廻屋幾久の川柳が添えられている。ここで描かれる柳亭左楽は、惣次郎放蕩の場面で作中に登場しており、作品と実在の人物が混在している。その他にも、粹興連のメンバーは挿絵に多く見られる。初編中巻には柳美の「聞くもうき鳴はなしやはるの宵」や、梅我の「ほと、ぎす啼くや口舌の中直り」という川柳がみられ、初編下巻には「生木さく斧のにくさよ春の山」という有人自身の川柳も見られる。そして挿絵に添える川柳は、粹興連によるものばかりとは限らない。初

編上巻の挿絵にある「春やなぎ着替えもいれるふねの中」という川柳には「柳ばし小春」とあり、二編上巻の挿絵にある「つらきやつらいであきらめもせうがなまじなさけが涙のたね」には「柳ばし梅吉」とあり、三編上巻の挿絵にある「秋の夜もはなすにた、ば旅もどり」には「柳ばし金八」とあり、柳橋に実在していたであろう芸者達の名前が見られる。彼らは山々亭有人と関わりの深い人物達であろう。

また、挿絵で見られた川柳や狂歌は、本文との関連が見られる。例えば初編上巻の「春やなぎ着替えもいれるふねの中」という小春の川柳は惣次郎等が舟で遊興する場面で見られ、初編中巻の「ほと、ぎす啼くや口舌の中直り」という梅我の川柳は、惣次郎とお楽の口説きの場面の挿絵に添えられている。内容と挿絵と川柳や狂歌が一致していることから、これらの川柳や狂歌は『春色江戸紫』の刊行のために作られたものといえる。こうした粹興連や実在したことがうかがわれる芸者達の関わりは、『春色江戸紫』の刊行に対して影響を与えていたかは不明であるが、全面的な支援があったことは確かである。

明治十六年では、一冊の本として出版されたため、元治元年版の三編全九冊の構成を取っていない。元治元年版は各編それぞれ上中下巻の三冊にわかれ、各巻のなかでも回に分けられて

いる。こうした構成は、人情本の構成として一般的なものである。しかし明治十六年版では一冊の本となったために編と巻の区別はなく、巻の中の回の区切りのみが利用されている。これに伴って二編以降の序文や口絵・三題断も見られない。これによって、元治元年版に見られた山々亭有人と粹興連のつながりは影を潜めている。

また、絵師が尾形月耕となつていることも注目したい。月耕は、独学で浮世絵を学び、輸出用の陶磁器や漆器の下絵を描き、『絵入朝野新聞』の挿絵を描くなどして活躍した⁽¹⁰⁾。また明治十年代後半には、単行本の挿絵画工として活躍している⁽¹¹⁾。この『春色江戸紫』は明治十六年刊のため、まさにこの時期に手掛けた挿絵のひとつであろう。その後、肉筆画においても功績を残し、日本美術院にも参加して、明治二十七年には当時の皇太子の前で競馬の図を揮毫するなど活躍している⁽¹²⁾。

その尾形月耕による明治十六年版の挿絵を元治元年版の挿絵と比較すると、基本的には元治元年版の挿絵の構図をもとにして描かれている。しかし挿絵に添えられていた川柳や狂歌の作者名が削除されている例がある。それが「散るまでの覚悟見せたる柳かな 文松」「ほと、ぎす啼くや口舌の中直り 梅我」「生木さく斧のにくさよ春の山 有人」の三例である。「散るまで

の」の川柳は、初編上巻のお貞の病床を惣次郎とお組が看病する図の中に添えられている。文松の詳細は不明だが、文松の名があるべき所に「月耕画」としている。「ほと、ぎす」の川柳は前述したように、初編下巻の惣次郎とお楽が寄り添う図の中に添えられている。梅我は粹興連の一人として、『粹興奇人伝』に名を連ねている。これも梅我の名の所に「月耕画」とある。「生木さく」についても前述したように、初編下巻の惣次郎とお組の図に添えられている。この川柳は、『春色江戸紫』の作者である山々亭有人自身の作であるが、名前が消され「月耕画」とある。挿絵は各回に一図で合計十八図ある。その中の三図の挿絵の中にある川柳の作者が記されず「月耕画」が置き換わるように記されている。十八図中三図のことではあるため、意図して名前が削除されたかどうかは分からない。しかし、編と巻の構成をなくし、それに伴って二編と三編の序文や口絵、粹興連からの三題断が失われていることと合わせみれば、元治元年版が粹興連を挙げて山々亭有人の刊行を祝っているのに対し、明治十六年版は山々亭有人と粹興連との関係性が見られないものへと変化している。そして、当時活躍している月耕を画工に採用していることで、粹興連との関係よりも、月耕による挿絵が宣伝効果を発揮していたのではないだろうか。この元治元年版

と明治十六年版の違いの背景には、当時の出版情勢や山々亭有人の明治における活躍が影響していると考えられる。そのため、人情本が明治初期にどのように受容されていたのか、今後も調査する必要がある。そのためには、有人の周囲である粹興連との関わりが重要である。

五、おわりに

『春色江戸紫』は、写本『江戸紫』の改作作品としての側面と、衰退期にある幕末に出版した人情本という側面がある。『春色江戸紫』は、他の改作作品とは異なり、脚色や歌舞伎の利用は見られないものの、惣次郎の馴染芸者お楽が登場し、お組への教訓の場面が増加するという特徴が見られた。これによって、『春色江戸紫』は惣次郎の足跡をたどることよりも、残された女性達がどのような状況に置かれてきたのかということに重点が置かれている。そこで描かれていたのは、惣次郎の勘当後に恋の不安定な状況に置かれたお組とお楽である。こうした状況を、読者は疑似体験し、惣次郎と再会したお組とお楽の喜びをもとにしていたと考えられる。このように読者が登場人物の行動を疑似体験するためには、お組とお楽が惣次郎不在に

よる不遇の時が重要な意味を持つ。つまり『春色江戸紫』では、惣次郎の「商家繁栄譚」という大きな人情本の型の中で、惣次郎の勘当を契機として二人の女性の哀れな様子を描いたのである。さらにお組を苦境に立たせたことで、お組への教訓をお組に感情移入する読者へも作用させることとなった。

本稿では、『春色江戸紫』を改作作品の一つとして、また人情本として捉えたが、教訓性の強い作品が幕末に出版されたこと、また明治十六年に再版したことは、あらためて考える必要がある。そのためには、山々亭有人とその周囲の粹興連との関わりが重要である。また山々亭有人は、『春色江戸紫』の他に『春色恋廻染分解』『花曆封じ文』などがある。これらの作品に対しても研究をすることで、幕末の人情本を取りまく状況や明治期での需要が明らかになるだろう。また、山々亭有人が明治に新聞小説で活躍したことから、幕末から明治への文壇についても重要なことである。

〔注〕

- (1) 前田愛「江戸紫―人情本における素人作者の役割―」『近代読者の成立』（筑摩書房、一九八九年五月）によると、「文章技巧の拙さ、たどたどしさから判断して、文筆の仕事に慣

れない初心の人の手になったものであることは断定できると思う。」と述べている。また、拙稿「写本『江戸紫』モデル考」『国文学』九十九号（関西大学国文学会、二〇一五年三月）において、宗治郎のモデルと考えられる人物を示唆した。作者はその周辺の人物であろうか。

- (2) 「写本『江戸紫』諸本考」『中本研究―滑稽本と人情本を捉える―』（笠間書院、二〇一七年二月）所収。

その他、写本『江戸紫』の諸本調査として、武藤元昭氏『人情本の世界―江戸の「あだ」が紡ぐ恋愛物語―』（笠間書院、二〇一四年四月）所収。がある。

- (3) 『江戸紫』国立国会図書館所蔵本（請求番号…一八九―三〇三）

- (4) 『春色江戸紫』弘前市立弘前図書館所蔵本（請求番号…W九一三・五四・四九）

- (5) 『春色江戸紫』東北大学図書館狩野文庫（請求番号…一―二一〇七六一三）

- (6) 『春色江戸紫』明治十六年版、国立国会図書館所蔵本（請求番号…特六四一六三六）

- (7) 粹興連とは、粹狂連と笑興連が結びついた名称である。『粹興奇人伝』に粹興連に参加した人物が記される。

- (8) 「女が小説を読むということ―『春色梅児誉美』論」『学苑』七八五号、(昭和女子大学、二〇〇六年三月)
- (9) 井上泰至「『いき』の行方―春水人情本瞥見―」『学苑』八〇二号、(昭和女子大学、二〇〇七年八月)
- (10) 『原色浮世絵大百科事典』第二卷(大修館書店、一九八二年八月)
- (11) 岩切信一郎「尾形月耕―明治十年代から明治廿年代の活動を中心に―」『浮世絵芸術』一四四卷(国際浮世絵学会、二〇〇二年)
- (12) 『日本美術院百年史』第一卷下「資料編」(日本美術院、一九八九年四月)

(くろさわ さとり／本学大学院生)